

海臨寺とその大墓覚書

宮津市 中嶋利雄

海臨寺（舞鶴市字田井、禪臨濟・東福寺派）に大墓と称する墓地がある。大墓という語は字名に用いられたりするところからみると、惣墓を意味する語かとも思う。私は一九七六（昭五二）年以来九回ここを訪れているが、なかなか分からないことが多い。

一、寺史について

開創を南北朝期とし、曇翁源仙どんのうげんせんを開山とする寺伝は疑いを入れない。この点丹後臨濟の古寺のなかでも注目すべきであろう。東福寺開山聖一せいいつ国師の弟子白雲慧暁はくうんけいは東福寺四世で永仁二年（一二九四）栗棘庵くりつぎあなを開創、その門のひとり谷翁道空やうおんどうくうがあり、曇翁源仙はその門に出ている。海臨寺開創について多少煩雑にわたるが史料について述べておきたい。

先ず「竜安十境」について述べることにする。室町時代五山文学の大家岐陽方秀きやうほうしゅうの作「

竜安十境」は応永二十二年（一四一五）の作、竜安寺は丹波船井郡桐野（現園部町）蟠根寺（現、禅曹洞）のことである。次に関係部分を煩をいとわず「東福寺史」より掲載しておく。（読み下しは筆者）

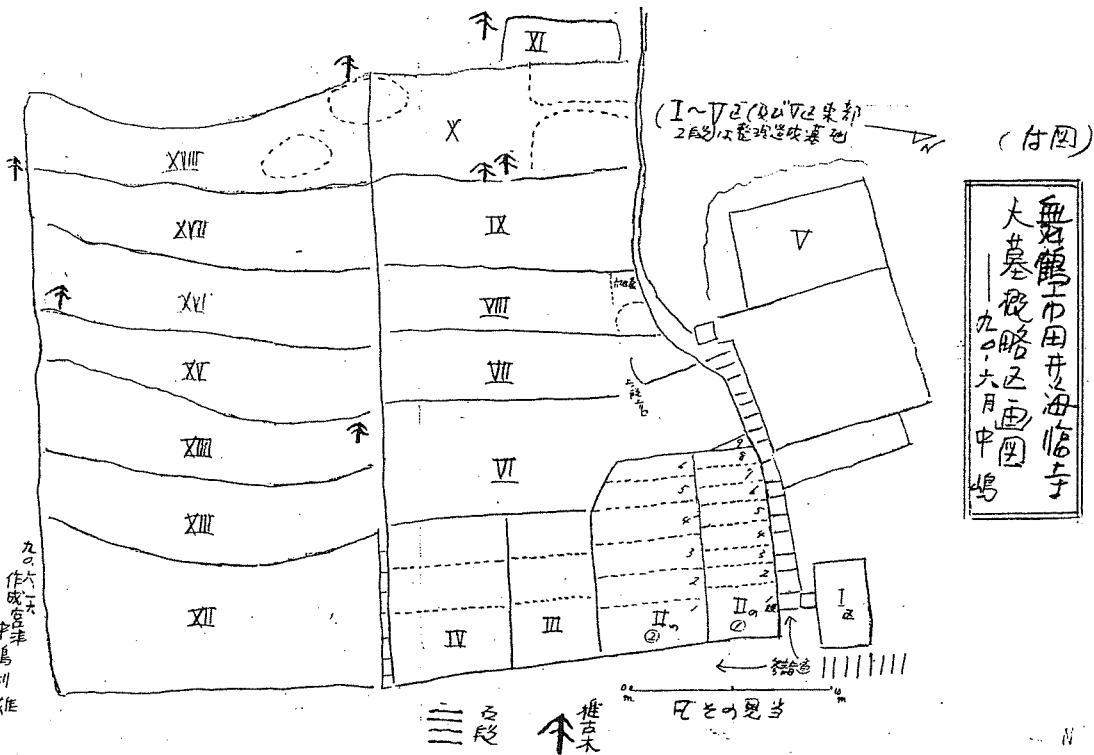
信士しんし官道公、法名祖妙、観応の間、丹後に在り、曇翁仙和尚に謁し、弟子の礼を執り、崇奉惟れ篤し、其の後二十余年、公桐野を領し、便ち斯の地を相収す、窪めるは之れを墳め、穹きは之を夷かにし、役々土木、竟に、応安癸丑の歳を以て寺成る、殿堂廊廡・像設鐘鼓、凡そ叢林に有るべきとする所は悉く備う、而して曇翁に請うて之れに居らしむ、曇翁徒に訓えて規度あり、至徳丙寅七月二十一日に於て終す、年七十三（中略）
私註 1. みやじ又みやみち。蟠根寺位牌に、竜安院蟠根寺殿祖栄活妙大居士。室町幕府政所代の家蟠川氏親朝。因みに、

「寛政重修家譜」に、親朝「尊氏につかふ、累世公領丹波国船井郡桐野河内に住す、桐野に寺を建立して蟠根寺といふ。曇翁仙和尚をこふて開山とす、某年死す、法名祖妙」 2. 蟠川氏が観応（三五〇〜五二）の間、丹後に住したということ
は考えられない。丹州（多くは丹波を指す）を誤ったか。 3. 応安癸丑は六年（一三七三）、この年蟠根寺完成、開山曇翁和尚。 4. 至徳丙寅は三年（一三八六）、曇翁示寂。

ここには田井海臨寺開創に触れていない。曇翁出生は示寂の年より逆算して正和三年（一三一四）と考えられる。とすると蟠根寺開創は六十才、蟠根寺開創に至るまでの二十余年は、とても丹後に下って一山の開山となるなど考えにくい。海臨寺蔵の曇翁禪師頂相の容貌はかなりの年令を思わせるし、更にその贊に、「谷翁室内得心傳／隨處住庵三十年／独有竜安山上月／（中略）／海林開山曇翁／仙禅慈像□／退畔老衲性海／拜贊」とあるのも、「隨處住庵三十年」（そのうちに蟠根寺建立に至る二十余年も含まれると理解する）のちに「海林寺」開創という意であろう。だから「海林寺」開創は禪師晚年として誤りはないと考える。但し示寂のところは「竜安

に、カラト墓側壁の刻銘に天正十三年（一五八五）のものがあり、中の一石五輪二基もその時代にふさわしい形をしているから、確かな刻銘のあるものを根拠とする限りでは、カラト墓の出現は近世の極く初頭ということになる。官津地方で板碑や単独一石五輪は、元禄前後を境に急速に三角墓に転移する。このことは丹後全域を通じての傾向といえるように思う。ところが大墓においてはその三角墓が極端に少なく（Ⅱノ2区上段に二基みられる）、丹後全体を通じて一般に三角墓出現の時代には、既にその以前からカラト墓が行われて三角墓の出現を極度におさえているように思う。しかもカラト墓出現の時代にはさきの(1)の一に属する一石五輪や、板碑と共存の時代が続いたと思われる。近世初頭に全面的・急速にカラト墓に移行したとは考えにくい。ただしその一石五輪や板碑の消滅の時期は、丹後の他の地方と大きな差があるとは思われない。そして一般には、近世後期にかけて、頂部アーチ型墓、更にそのうち頂部方形型墓へと移っていくのに、ここではその時代に於てもカラト墓又はカラト型笠塔婆が最も多く行われているのである。

墓塔を地域文化の問題としてみるなら、このような民俗が他のどの地域に関連をもつ墓地である。その他の区画のうち、Ⅱ区ⅠⅤ区が私の調べたところである。調べたところでもほんの表面的な観察で、次に述べることもがらもお粗末な試論に属することが多いと思うが、ご批判がいただければ幸いである。



九、六月中場
作成
中嶋利雄

十境」の如く、再び丹波にのぼって蟠根寺とすべきであろう。

なお東福寺編『東福寺史』には、丹後青蓮寺（現、舞鶴市大波）の開山を曇翁の師谷翁道空としている。また海臨寺蔵明治十二年『寺院明細帳』は海臨寺末寺帳であるが、その中にも、曇翁開山の寺として江正庵（大山）・海蔵寺（三浜）・正伝寺（瀬崎）・洞春庵（大丹生）・極楽寺（析尾）・海潮庵（下大波）・高秀庵（杉山）・金竜寺（田中）を挙げている。何れも証明すべき資料なく、伝承の域を出ないものであるが、海臨寺を中心として東福寺栗棘門派の教線の浸透の深いことをうかがわせる。

『丹後国加佐郡旧語集』（『舞鶴市史史料編』所収）に、海臨寺を至徳三年建立とし、こんにちまで地誌類に援用されているのは誤伝であることを付言しておく。

二、大墓について

海臨寺南方、境内に接してほぼ三〇m×四〇mの墓地がある。そのほかにも付近に散在墓地がみられるが、いまはそれら散在墓地を除いて、その中心大墓について考察してみたい。その大略の区画図は別図のとおりである。そのうち、Ⅰ区は無縁墓、Ⅴ区は海臨寺歴住

墓地である。その他の区画のうち、Ⅱ区ⅠⅤ区が私の調べたところである。調べたところでもほんの表面的な観察で、次に述べることもがらもお粗末な試論に属することが多いと思うが、ご批判がいただければ幸いである。

1. 大墓全体景観の特色

(1) 圧倒的に多いカラト（石籠）墓（前方に扉がついて、なかに一石五輪を入れる）と、カラト型笠塔婆（上の屋根部はカラト墓と同じであるが、塔身が短形の一石で、表面に一石五輪などの浮彫を施したもの、扉がないので敢えて笠塔婆と仮称しておく）。この種の墓塔は若狭・丹波にも多く、丹後においても北部熊野郡に至るまで広く行われている。もっとも、北部にいく程、又内陸部に入る程、その密度は薄くなるといえる。

(2) 三角墓（頂部圭頭形で、一七〇〇年頃を中心前後をあわせて六、七〇年の間へ延宝（享保の間）に用いられた墓塔）が極めて少ない。

(3) 戦国期～近世初頭に造建の宝篋印塔が七基もある。

(4) 中世～近世初期の板碑及び一石五輪はその大部分がⅠ区に集められ（尤もこの中には近隣出土のものもここに持ってきたものも多い）、その他Ⅱ区・Ⅲ区の後方に集められた

ものもある。

2. 大墓についての若干の考察

(1) 一石五輪の問題 この墓地の一石五輪には二系統を分けて考えねばならない。一は中世より近世初頭にかけて、それ自体単独で墓塔として土中につきさしなどして建てていた一石五輪、二はカラトの中に納められている一石五輪である。一はその大部分が現在無縁墓に集められ、二の一部もその保護屋であるカラトを失い無縁墓に集められている。一について年紀銘を有するものに大永三年（一五二三）銘のものが無縁墓にみつかっている。因みに、一の一石五輪で丹後各地で私がみた最も時代の早いものでは、官津大島頭孝寺墓地に文明七年（一四七五）銘のものがあるし、後期のものは元禄期にとどまっていることを付言しておく。二については次の(2)項においてふれる。

(2) 板碑の問題 一般に舞鶴地方の板碑は官津地方のそれに比べて複雑なものが多く、この墓地で年紀銘を有するものを未だ見えない。大まかな観察では十五世紀中期頃まで遡ると思われるものは極めて少ない。

(3) カラト墓出現の時期 確かなことはいえないが、私の十数年前に調査した時（現在のように墓地が整理される以前）の写真の中

うことには、その変貌に特別の重味をもつものがあると考えたいということである。それを私は近世初頭における村の支配百姓層の大きな変化の反映とみてはどうかと考えてみるのである。私のあてずっぱうな推断かもしれない。

(二) 大墓には宝篋印塔の問題、無縁墓発祥の問題等たくさんあるがいまはふれないでおく。ただこの地方の宝篋印塔についていえば田井・野原・三浜・小橋等海岸地方に多くあるというところは、格別の意味づけが出来るかもしれない、たとえば戦国水軍の中での有力層と関わりがないかなど、私はいまそんなことも考えているのである。

海臨寺史に関しては、ご住職から貴重なお教えをいただきました。記して謝意を表します。



報告 桂林寺境内での 遺物採取について

八九年九月二四日四時頃、墓参りのため桂林寺(舞鶴市紺屋町)を訪れたところ、入り口の山門をくぐって、総門への通路(総門の壇下)の北側に、約四米四方、深さ約三米の穴が掘られており、その掘り上げ土が北側の駐車場に積み上げてあった。

土の山に取り付き、ざっと見て陶器片三個、土師器一個を得た。翌日、舞鶴市史編纂委員井上金次郎先生の鑑定を仰いだところ、陶片は明朝の上期、土器は土師器であろうとのことであった。

そこで、同日、高橋卓郎舞鶴市文化財保護委員と吉岡博之氏(舞鶴市教育委員会)に電話を入れて報告し、吉岡氏宅に出土片を届けた。翌二六日午後、吉岡氏から連絡があり、現場を実見し遺物を採取し、任職にお会いして報告し注意を促した、遺跡地図に遺物採取地として記載する、とのことであった。(既に桂林寺境内では現無縁仏墓地造成時に、高橋氏に依って遺物が発見されていたことを後

に知った。)

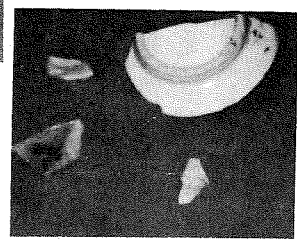
後ほど私も現住竹村月海師にお会いし、勝手に遺物採取を行ったことをお詫び、出土遺物を舞鶴市教育委員会に移管する許可をお願いした。竹村住職には快く許可して戴いたばかりか、丁度出来したばかりの絵葉書集を頒けて下さり、みずから案内して下さって画幅『當山全圖』(文政四年 横山華山筆)を拝観した。また、市指定文化財の『涅槃圖』を新装して檀家など参拝者に供したいこと、古文書類の整理を進めたいことなどをこども話され、文化財への深い理解を示された。その後も夕刻工事関係者の帰った後、再三現場に行き、瓦片・陶器片・土器片などを表土採取した。採取遺物は、吉岡氏分を合わせて七九個にのぼる。

後に防火用水槽が埋設され、元の駐車場には、掘り上げ土を均して新墓地が完成した。

出土物

1. 須恵器片 六世紀末 数片
2. 土器片 素焼き 厚手
3. 鉢片 明朝上代(南北朝)
土、葉、焼き締まり、いずれも古雅
他にも数片 中国製様のものあり
所見 ①虫食いあり。

- ② 刷毛線がにじんでいる。
- ③ 高台の薬止めが削られている。
- ④ 釉の滴りが放置され大雑把。
5. 古伊万里片 磁器 江戸上期 多数
6. 瓦片 狛犬か 作り出し
7. 甕片 二片
8. すり鉢片 安久備前焼か 数片
9. 瓦器片 鎌倉時代か 二片
10. 陶器片 墨書か



天香山桂林寺は曹洞宗中本山の古刹。応永八年(一四〇一)洞林寺として笠翁雄仙和尚が開創。のち地頭坂根修理亮が父桂林院のために三十石を寄進し、名を桂林寺と改めた。桂林寺の元寺が大内にあったという伝承があり、大内郷内と考えられる円満寺隣寺との関わりに関心が寄せられる。また、洞林寺以前に薬師寺・八幡宮が同地に存在した。「惟宗保音寄進状」(貞和四年(一三四八))「丹後郷土資料館収蔵目録 第一集」(八十年)には桂林寺の北側に薬師寺分山林畠があり、桂林寺寺地は元薬師寺領であったと見える。のち天和三年(一六八三)の『紺屋町絵図』には、桂林寺の堂宇の南側に「やくし/八まん」と添書された二つの小字が描かれていて、その変遷が窺われる。(桂林寺については松本節子「舞鶴文化財めぐり」第二〇一〜二一四回『舞鶴市民新聞』が詳しい。)

「惟宗保音寄進状」などによれば、桂林寺所在地の古地名は在田といひ、田辺郷八田村にあった。在田(アリタ)・八田(ハッタ)はともに古代の壱田(ハリタ)の転化地名と考えられる。(参照 拙稿「八田一ヤタかハッタか」『舞鶴文化懇話会会報』第二六号 八九年)

今回の遺物出土により、六世紀末には当該

地に村落があったと推定しうることとなった。また、南北朝期以後に明より招来した器を用する生活が営まれていたことも明らかになった。

出土遺物は古墳時代から鎌倉・南北朝・室町・江戸時代などの時代にわたる。今回は攪拌土からの採取であるが、機会を得て学術的な発掘による桂林寺の寺構の変遷や古代の集落の解明が期待される。

一九九〇年四月一二日
(報告 加藤 晃)

志楽荘研究会 の報告

十二月十七日金剛院において、舞鶴地方史研究会の主催で講演会が開かれました。七十余名の出席、丹後資料館の石川先生の講演、「志楽荘は舞鶴の中世を調べるのに欠かせない、梅垣西浦文書は最も大切な資料であり、西大寺文書、醍醐寺文書とも関係ある。外に金剛院文書、阿良須神社文書などは日本各地よりやってきて研究されている。舞鶴に住ん